



みえるものとみえないもの展  
#1 中島崇「一縷の嵩」  
9.18 - 9.27 2020  
宇和島運転区扇形車庫  
Mieru-mono To Mienai-mono  
[The Visible & The Invisible]  
#1 Takashi NAKAJIMA  
Uwajima Railway Office Flabellate Garage

JR 四国宇和島運転区扇形車庫再生準備事業プログラム  
主催：床下土風  
プロジェクトキュレーター：タムラサミチ (artport)  
ディレクター：新津保朗子  
後援：JR 四国・宇和島市観光物産協会・宇和島市  
伊予銀行・アロマハウスリーフ・洋菓子ヨーデル  
隈研吾建築都市設計事務所

## 一縷の嵩 - 作品について -

今までストレッチフィルムという薄く軽く儂いけど強度や耐性を合わせ持つ素材で空間作品を作ってきました。

古めかしい扇形機関庫は見た目こそは大きな空洞ですが、鉄でできた汽車が石炭のエネルギーで白煙をあげて行き来していた今日までの長い歴史と、それに関わってきた人たちのことを考えると、とても濃密に感じられます。

## 28994回目の光 - 展示について -

今から100年以上も前の1914年、宇和島鉄道の起点として宇和島に駅が生まれた。それから二年後、宇和島駅は須賀川をわたり500mほど南に下って現在の場所に落ちついたという。やがて宇和島鉄道が国鉄になり、戦争をまたいで国鉄が四国旅客鉄道になっても、宇和島駅は入り組んだ海と山にあいだに線路の音を響かせてきた。その音は次の100年後も響いているかもしれない。

ここに転車台ができた1937年に鐵道省が刊行した『日本案内記 中国・四国篇』には当時の国鉄宇和島駅の様子がある。「南豫の中心地で、灣入深き宇和島灣の最奥に位して居る。前面即西には宇和島灣に泛ぶ數多の島嶼を控え、南東北の三面は山嶺を繞し、須賀川は市を東西に貫流して居る」と今も変わらぬ風景が伝えられ、人口は今の約半分の4万5千人、綿織物、醤油、酒、焼酎、蒲鉾の産地として栄え、闘牛の文化で知られていたことがわかる。

宇和島運転区にこの扇形庫ができたのもちょうどその頃で、精確な記録はないが一説には1941年7月2日のことだという。その独特のかたちは、汽車の向きを広場の転車台で変えてやり、そこから放射状に線路を広げて、その先の屋根の下へと車体を案内するためのものである。早朝から夜間まで走り続けた汽車を寢床に迎えるために連携するこの広場と建物は、機関車が引退して転車台がいなくなった今では二度と作られることがないものだろう。

このかけがえのない場所を地域で大切に引き継いでいきたいという人々の想いがこの展示会のはじまりだった。宇和島運転区の方々も汗だくになり草刈りや掃除をしてくれた。この場所を知る人と話すたび、かつての整備の様子や広場でのボール遊びのような記憶が次々と溢れてきた。当時のまま残る道具や作業小屋の佇まいには汽車と人間がともに働いてきた時間が今も漂う。風土とともにこの場所を包み込んできたそうした時間や人々のつながりのようなみえないものにほんの少し何かを加えてみえるものにした。床下土風の天津保のそうした想いもあり、透明のストレッチフィルムをレンズのように用いて場の光や空気の流れをかたちにする作家の中島崇を招くことになった。

弱そうで強いストレッチフィルムという素材と、空っぽに見えても濃密な扇形機関庫という場所。そのふたつを重ねて、その場に差しこむ光をレンズのように集めることで見えないものを浮き上がらせようと思いました。

そこに積み重なったものをつなぎとめる一筋の光に質量を感じていただけるよう、この作品を「一縷の嵩」と名付けました。

(中島崇 2020.9.18)

宇和島の扇形車庫はまるで太陽の通り道をなぞるように真南に大きな弧を描いている。東・南・西の三面に等間隔に開いた大きな窓は、日の出から日没までの光を余すことなく受けとめ、木々の様子や空模様を窓枠で切り取って壁にずらりと並べる。窓と壁でリズムカルに光と陰が反復する南側とは対照的に、汽車を迎えるために柱だけを残して大きく口を開けた北側では、広場からのやわらかな光が景色とともにどっと流れ込んでくる。そんな光が南北になだらかに混ざり合い、風に流れる雲とともに揺らいで、遠いはずの空が近くに感じられる。それは季節や天気に応じて少しずつ表情を変えながらも、この大きな窓と庇でできた車庫が日々くりかえしてきた光のかたちといえるだろう。

この車庫ができたときとされる79年前の7月2日の天気図によると、伊予の空は晴れ模様。遠くのフィリピン海では台風が発達し、宇和島は西からの軟風。周りの木々が時折ざわめき、車庫には真夏の強い日差しが注がれていた様子が思い浮かぶ。昨年にここを初めて訪れたときは、どしゃ降りの激しい雨音が響く中、ぶあつい雨雲ごしの淡い光が遙か上空の激しい気流にあわせて車庫の中を流れていた。そこに広場を抜ける風が流れ込んで、とても大きな空気の動きを肌で感じたことを今でも思い出せる。

この展示会が始まる2020年9月18日、南側の窓を28994回目の太陽の光が約半日かけて通り抜ける日はどんな空模様になるだろうか。その前日も、その翌日も、太陽は毎日昇り、海と大地を温め、そのあいだに風が吹いて、空に雲が流れる。そんな日々のかたちと季節とともに少しずつ表情を変えていく。一日と一年の周期がかさなりあう中心で、この広場と車庫は海と山に囲まれた宇和島の空を器のように受け止めてきた。ここに注ぐ光と風を集めて目に見えるようなかたちにしたこの展示会が、今ここにあるものだけでなく、ここにつながり、ここからつながっていくものを感じるきっかけになれば嬉しい。

これからもこの場所が多くの人々と年月を重ね、そのときどきの光と風の表情がここを訪れたひとりひとりの記憶になることを、そのひとりとして、心から願っています。

(タムラサミチ 2020.9.18)